

二〇二二年四月九日

クラス替えされて泣く子やリラの雨
百千鳥杜の要の楠大樹
踏切を貨車長々と過ぐ遅日
ジャスマインの香に咽びつつ試歩の道
過疎村の一家総出の入学式
里墓地の天蓋となる大桜

二〇二二年四月八日

一村の源泉は此処花あしび
喚鐘に僧の居並ぶ花の寺
太閤の座せし石とや名草の芽
味醂蔵ならば小路やつばめ来る
花吹雪浴びつグラントゴルフかな
石積は水軍の城春岬
サーブ打つコートの上に春の虹

二〇二二年四月七日

春愁や通天閣に灯る赤
いづくともなく沈丁の風通ふ
至福やな背ナに春浴び庭仕事
テニス打つボール花屑まみれかな
ぼんぼん船楽鳴らしゆく淀日永
風に寄り風に離るる花筏

二〇二二年四月六日

春筍の仔猫のやうに籠の中

むべ
もとこ
凡士
やよい
みきお
隆松

素秀
はく子
もとこ
なつき
こすもす
素秀
ぼんこ

たか子
みづき
明日香
ぼんこ
菜々
満天

あひる

手を合はすお堂老鶯本調子
軽トラに春筍をひさぎをり
職引きて夫は甘党新茶汲む

こすもす
あひる
なつき

二〇二二年四月五日

押すことも馴れて日永の車椅子
山門に雨宿りして初音聞く
振り返り振り返り見て花の道
老どちらラジオ体操花のもと
島と島またぐ大橋風光る

やよい
なつき
うつき
もとこ
智恵子

二〇二二年四月四日

のつたりと釣船たたく春の汐
仔牛鳴く牛舎に残る春灯
表札を見極むること燕来る
誰が呉れし春筍やドアノブに

凡士
素秀
たか子
素秀

二〇二二年四月三日

蛤をまさぐり探る足の裏
朱唇褪せ春愁めける観世音
大櫂芽吹きし樹下に屋台カフェ
花屑の渦を残して塵芥車
舟屋の灯揺蕩ふとして海朧

智恵子
素秀
うつき
せいじ
凡士

毎日句会みのる選・二〇二二年四月二日